ボジョレー・ヌーボー解禁、収穫量は最大30％減

熱波と雹でブドウ畑が被害を受け、販売が8％減少。生産者は軽やかな赤ワイン、ボジョレー・ヌーボーで反転を目指す

2026年11月20日（金）



ボジョレー・ヌーボーが11月19日木曜日の早朝に解禁された。販売減少が続き、収穫量も大幅に落ち込んだ一年を経て、生産者は軽やかでフレッシュな味わいが需要の下支えになることに期待をかけている。

例年どおり11月の第3木曜日、フランス東部のボジョレー産地の中心地ボージュで、日付が変わる午前0時に最初の樽が開けられた。同地では、新酒の解禁に合わせた5日間の祭り「サルマンテル」が開催される。リヨンでは、ビンテージトラクターで運ばれた樽が到着し、夜通しの祝賀行事のなか、市庁舎近くで若手醸造家たちが新しいキュヴェを披露した。

今年の解禁は、産地にとって厳しい時期に迎えた。業界によると、ボジョレーの販売は新型コロナウイルスのパンデミック以降、年3〜5%のペースで減少している。2026年には減少幅が8%に拡大した。一方、生産者は、ボジョレー・ヌーボーの原料となるガメイが、果実味豊かで軽やか、飲みやすいワインを求める消費者の関心に今も合致していると訴えている。

業界団体Inter Beaujolaisの会長、セバスチャン・カルギュル氏は、このスタイルがワイン消費全体の落ち込みを和らげる一助になっていると述べた。しかし、生産者の課題は需要の低迷だけではない。2026年の収穫量も25〜30%減少する見通しで、大幅な減収は2年連続となる。

生産量の減少は、フランス各地のブドウ畑を襲った一連の気象災害を反映している。雹に見舞われた厳しい2年間に続き、2026年の夏には熱波が繰り返し発生した。一部の畑では気温が華氏104度、摂氏40度を超え、ブドウの糖度は高まったものの、収穫量は減少した。

ワイン醸造家のヤニック・ド・ヴェルモン氏によると、根系がまだ十分に定着していない若木の区画では、収量が60%以上落ち込んだ。ボジョレーの収穫は8月半ばより前に始まり、この地域としては異例の早さとなった。産地はリヨン郊外からソーヌ川右岸のマコン周辺まで広がり、85の自治体にまたがる約12,500ヘクタールのブドウ畑を擁する。

生産者によれば、暑さは収穫量だけでなく、果実の個性にも影響した。カルギュル氏は、ブドウには夏の暑さの影響が見られる一方、2026年ヴィンテージは果実味とフレッシュさを備えていると述べた。収穫から数週間で販売されるワインとしては、例年より力強いタンニン構造もその特長を支えているという。

ボジョレー・ヌーボーの最大市場は、依然として圧倒的にフランスだ。業界によると、2025年に販売された1,380万本のうち、フランスの消費者が購入したのは900万本だった。海外では、日本と米国が引き続き最大の輸入国となった。業界関係者は東欧やアジアの新興市場でも明るい兆しがあると指摘しており、生産者が、ワイン消費の歴史が長い国々での需要低迷を補おうとしていることがうかがえる。

その影響はボジョレー産地にとどまらない。フランスを代表する国際的なワインのひとつで需要と供給の双方が縮小すれば、季節的な販売促進に依存する輸出業者、輸入業者、小売業者にも影響が及ぶ可能性がある。一方、供給の引き締まりが一部の価格を下支えすることも考えられる。今回の解禁は、世界全体でワイン消費が弱まるなか、軽やかで果実味のあるワインが消費者の関心を保てるかを試す機会にもなる。

ボジョレー・ヌーボーは、店頭に並ぶまでの速さから、ワイン業界で長らく独特の位置を占めてきた。解禁はワインそのものと同じくらい、マーケティングや祝祭と結び付いており、午前0時の解禁やフランス国内外で連動した販売が行われる。その知名度は産地の規模を大きく超える広がりをもたらし、販売量や生産量の年ごとの変化は飲料業界から注視されている。

今年の解禁は、ワイン業界全体が圧力にさらされるなかで迎えた。気候変動による打撃や消費パターンの変化が生産者に重くのしかかるなか、世界のワイン生産量は数年にわたる減少傾向が続き、2026年もわずかに減ると見込まれていた。ボジョレーでは、こうした圧力が市場の両側に表れている。販売できるボトルは減り、買い手も以前より少なくなっている。

それでも、このワインの個性を生かして存在感を守ろうと、産地は取り組んでいる。生産者は引き

続き、果実味が際立つフレッシュで親しみやすい赤ワインとしてボジョレー・ヌーボーを打ち出し、消費者が飲酒量を減らし、購入するワインをより選ぶようになるなかで、その魅力が際立つことを期待している。